

A Study of Teacher's Support to Children in Transactional Music Classes: Focus on the class in which a child in special class participate

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/7497 |

音楽科の教科交流における教師の支援についての一考察 —小学校特殊学級の児童が参加している授業を対象として—

A STUDY of TEACHER'S SUPPORT to CHILDREN in TRANSACTIONAL MUSIC CLASSES

—Focus on the class in which a child in special class participate—

篠原 秀夫

杉谷 怜子*

Hideo SHINOHARA

Reiko SUGITANI

本研究は、特殊学級の子どもが参加する音楽の教科交流の授業において、教師が特殊学級の子どもに対してどのような支援を行えば良いかということを中心にしようとしたものである。その為に、石川県内の小学校の授業実践を観察し、その主な活動についての分析・考察を行った。その結果、1.特殊学級の子どもが音楽の授業で「安心して表現できる環境」を整えること 2.子どもが自分の思いを「表現できる」ようにすること 3.共に育てるという体制を作ることが必要であることが分かった。

I. はじめに

音楽は障害のある子ども達にとって表現の為の大切な手段であり、自己存在を伝えるものでもある。これは音や音楽が、情緒や知能に何らかの障害がある子ども達にとってもコミュニケーションの手段や情緒の交流となり得ること、また音楽を楽しむことで子ども達の積極的な行動を引き出すことが、今までの教育実践の中で示されているからである。

筆者も、障害のある子ども達が音楽を楽しんでいる姿や、子ども達が障害のあるなしに関わらず共に音楽活動を行う場面に出会い、障害のある子どもに対する音楽の果たす役割の大きさを実感してきた。この経験から、学校教育の中で障害のある子どもへの音楽教育がどのように行われているかということに興味を持ち、授業観察を行ってきた。

いろいろな教育現場で観察を行ったが、その中でも「教科交流」の場面において、様々な実態が観察された。「教科交流」とは、通常の学校

にある特殊学級に在籍する子ども達が「交流教育」の一環として、通常学級での授業に参加することである。

「交流教育」は子ども達の豊かな人生を実現する為に必要不可欠なものとして行われている。特殊学級の子ども達にとって、「交流教育」として大集団の中で共同的な活動を経験することは、社会性や豊かな人間性を育み、様々な面において教育的効果を高めると考えられている。また通常学級の子ども達にとっても「交流教育」は、障害のある子ども達に対する理解を深め、共に助け合い、支え合う心を育むことができると考えられていることから、相互に教育的効果のある学習活動だと言える。その意義は、小学校学習指導要領（文部省、平成10年）の「総則」や、盲学校、聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領（文部省、平成11年）の「特別活動」の章においても述べられており、これからの特別支援教育においてもこの「交流教育」は重要な活動である。そしてこの「交流教育」には、

学校行事を通して行われる場合や日常的な活動の中で行われる場合、「教科交流」という教科学習の中で行われる場合等がある。

筆者は、この音楽の「教科交流」に焦点を当て、音楽の教師が授業中に、特殊学級の子どもに対してどのような支援をすべきか、ということに関して研究を進めている。本稿では、特殊学級の子どもが通常学級の他の子ども達と音楽を学んでいる小学校の実践を取り上げる。そしてこの音楽の「教科交流」において、教師が特殊学級の子どもに対してどのような考え方をもち、どのような方法で関わり、どのように授業を行っていけば良いか等、教師の支援のあり方について考える。

II. 研究の方法

教科交流を行っている音楽の授業での、教師の特殊学級の子どもに対する支援のあり方を明らかにする為に、石川県内の公立小学校の授業実践を数多く観察させてもらった。それらの中から、ある音楽専科の教師による小学1年生の音楽の授業、計13回（2007年1～3月）を取り上げる。そして授業を観察・ビデオで記録し、その主な活動について分析・考察を行う。以下に対象とする小学校や教師、子ども達についての説明を行う。

1. 特殊学級の概要

この小学校には特殊学級が3学級あり、計9名の子どもが在籍している。教科交流を行うかどうかは子どもの実態を配慮し、特殊学級の担任と交流先の教師との話し合いによって決められる。教科交流の際補助教員が必要な場合は、時間の空いている教師が行うことになっている。

2. 教師について

教師歴9年で、中学校特殊学級の担任、中学校の音楽、そして小学校音楽専科の経験がある。この小学校での指導は1年目である。

3. 特殊学級在籍の子どもAについて

広汎性発達障害。集団の場での決まったやりとり（名前呼びや健康観察など）には答えることができ、場合によっては要求や否定などを言葉で表現できる。しかし自分から人に対して話しかけることはなく、独り言を言っていることが多い。友達に対しても自分から働きかけることはないが、友達から誘われると一緒に行動できる。大きな集団での活動や新しい環境が苦手である。ひらがなや文章を読むことができ、数量的な概念もあり、順序性も理解している。教科交流は音楽、図工、生活、体育に参加し、音楽は後期から補助教員がつかなくても一人で参加できている。歌（特に童謡）やキーボード、音の出る絵本などが好きで、階名も理解している。

4. 学級について

元気の良いクラスで、Aに対しての接し方も良く、協力的な雰囲気である。他にも1名、3学期から特殊学級で授業を受けている子どもがいる。

5. 1回の授業のおおまかな流れ

音楽の授業は週2時間行われている。今回は下線を引いた3つの活動について取り上げる。

- ・ 休み時間
- ・ 活動① リズムにのって名前呼び
- ・ 活動② 歌唱活動
- ・ 活動③ 鍵盤ハーモニカ
- ・ 毎回異なる活動（鑑賞、身体表現等）
- ・ 休み時間

III. 観察結果

ここでは授業中に行われた上記の3つの活動について、活動毎に観察記録を記述する。活動の目標、内容、Aの様子と教師の支援を先にまとめ、活動全体の流れの中での教師の支援とAの様子を記述した。

1. 活動①『リズムにのって名前呼び』

○目標：簡単なふし遊び、リズム打ちをさせることで、生活に必要なリズム感覚を養い、一人一人に自己存在感を感じさせ、参加意識を高めることを目的としている。目標は、リズムに合わせて名前を呼ぶことができ、身体を使っていろいろな音を出すことで、様々な表現ができる楽しみを感じることである。

○内容：日直2名がエレクトーンのリズムに合わせて、手拍子をしながら出席順にクラス全員の名字を呼んでいく。呼ばれた子どもは手拍子（どこを叩いても良い）をつけて「はい」と返事する。

○Aの様子と教師の支援：入学当初は呼びかけに対して、手を叩く、返事をする、のどちらか片方だけであった。友達が一緒に返事や手拍子をし、教師は片方の返事だけでも評価していた。それを続けていくうちに、手を叩きながら返事をするという2つの作業を同時に行えるようになり、友達の名前も出席順に覚え、呼べるようになった。

○活動の流れ：当番2名が教壇の前に立ち号令をかけた後、教師はエレクトーンのリズム演奏をつける。テンポは子どもが名前を呼びやすい速さに設定する。

教師：♪はい、どうぞ（子どもがリズムに合わせて入りやすいように）

当番：♪○○さん（手拍子つき）

出席順に、拍子に合わせて名前を呼ぶ。
呼ばれた子ども：♪はい（手拍子つき…手や頭、膝や床など自分の好きな場所で手を叩く。リズムも自由に変えて良い。）

教師：いいね！（子どもの返事に対して評価表現「じょうず!」「おもしろい!」等を使う。）



手拍子例:

譜例1『名前呼び』

当番の子どもがうまく拍を保てない場合、拍の感覚を覚えさせ、正しいリズムを保てるように、教師は当番の背中や肩をリズム打ちしながら呼ばせる。

当番の呼ばれる番になると、当番以外の子ども達全員が当番の名前を呼ぶ。また、当番が欠席者の名前を呼ぶと他の子ども達全員が♪「おやすみです」と答える。

教師：全員の名前が呼ばれると「みんなうまくなってきたね」等と感想を言い、リズムを止める。

■ Aの様子

① 最初からこの活動に参加している場合

他の子どもが返事をする様子をじっと見て真似したり、当番が他の子どもの名前を呼ぶのと同時に自分も他の子どもの名前を言ったりしている。

② 他のこと（教科書を見る、鍵盤ハーモニカを弾いている）をしながら名前を呼ばれても気付かず返事しない場合

教師：当番の後に続いて、Aを苗字で呼んだりあだ名で呼んだりする。

他の子ども達：Aをあだ名で呼ぶ。

教師と子ども達：Aの様子を見ながら名前を呼ぶ。

A：何度目かで返事をする。全員に呼ばれてびっくりして気付くこともある。気付いたら必ず返事をする。返事は「はい」に限らず、いるにも関わらず「お休みです」「教室です」などと違う

返事をすることもある。返事をする時の手拍子にも工夫が見られ、打つ場所を変えたり、リズムを変えたりしている。

2. 活動② 『歌唱活動』

○目標：「いろいろな曲を、身体表現を入れながら歌って楽しもう。」である。

○内容：「きっとできる」「校歌」「冬の歌」の3曲を歌っている。「きっとできる」はこの学校の「1月の歌」で、明るく歌詞が分かりやすい低学年向けの曲である。黒板に大きな歌詞カードが貼ってあり、子ども達は自由な雰囲気の中、友達と顔を見合わせながらリズムにのって大きな声で歌っている。教師は足鍵盤と8 Beatのリズムをつけて、メロディーと伴奏を弾きながら歌う。「校歌」は、6年生を送る会や卒業式の為に練習している。この曲は前を向いてしっかり歌うことを目標としている。「冬の歌」は季節の歌として取り上げられている。テンポが速く、歌詞も難しいが、子ども達はその速さや歌詞を面白いと感じているようである。

○Aの様子と教師の支援：Aは童謡が好きなので、教師は授業中、童謡をなるべく多く扱うようにしている。教師は1時間の中でAの興味を引く教材を、必ず1曲は設定するようにしている。Aは「きっとできる」と「冬の歌」は好きなようだが、「校歌」は歌詞が難しいのでなかなか歌わなかった。しかしくり返し授業で取り上げる中で歌えるようになってきた。

○全体の流れ：この活動において、Aの様子は場合によって違うので、それぞれの場合に分け、それに対する教師の対応も分けて記載する。

教師：①曲名を言い、前奏を始める場合と、
②曲名を言わずに始める場合がある。

A：①教師の声かけや前奏に反応し自分で楽譜を開いて立つ。

②教師の声かけに反応せず、立たない。

教師：Aが全体の声かけに反応しない場合には次のように働きかける。

①エレクトーンの場合から「A『きっとできる』(するよ)！」と声をかける。

②Aの目の前まで行き「A、『きっとできる』(するよ)！」と声をかける。

③自分の楽譜をAの目の前で開いて見せて、声をかける。

Aの隣の子とも：Aが楽譜を開かない場合には、Aの楽譜を開いて「Aちゃん歌うよ」と言って渡したり、Aが立つよう促す。

A：①その楽譜を受け取って歌う。

②座ったままである。

教師：曲中や間奏の間、全員の様子を見回したり、一緒に歌ったり、指示を出したりする。姿勢や口の形を注意したり、子ども達を評価(「○○さんのお口素敵だね!」「○○さんとっても良い姿勢ね!」など)する。一人一人の名前を呼んで評価する機会が多い。

A：立って歌っていても途中でやめて座る場合がある。

教師：Aのことを演奏中もよく見ており、Aが座ってしまうと注意する。歌っている時にAと目が合うと、普段よりも大きな口を開いて歌ったり、楽しそうな表情をしたりする。

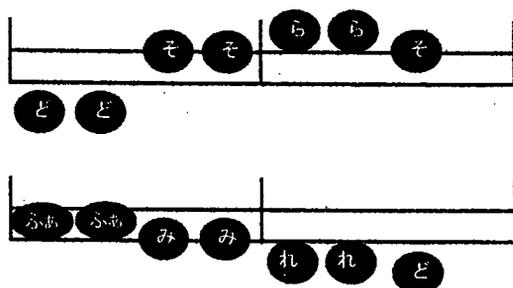
A：このような教師の姿を見ると、教師をじっと見つめ、表情に変化はないが、よりリズムに乗って体を動かして歌うなどする。

3. 活動③ 鍵盤ハーモニカ

○目標：「吹ける楽しさを知ろう」である。

○内容：鍵盤ハーモニカの学習は6月から行っ

ている。始めは「ド」だけを使ったまねっこゲームなどの遊びから始め、徐々に鍵盤に慣れさせ、教科書にある「ド」と「レ」だけで吹ける曲に取り組みさせていた。慣れてくると音域を増やし、1月には「ちょうちょ」「メリーさんの羊」「きらきら星」「よるこびのうた」「アンパンマン」等の曲に取り組みさせていた。楽譜は以下のようなひらがなのもので、一人一人に配られていた。鍵盤にはひらがなの「どれみ」シールを貼っている子どももある。個人または全員一斉に練習し、弾けていると教師が判断すると、子ども達には1曲ずつ合格シールが与えられ、全9曲を合格することが課題であった。



譜例2 『ひらがな楽譜』

○Aの様子と教師の支援：始めから楽譜を見ながら曲を階名で歌うことはできていたが、鍵盤ハーモニカに向かうと曲通りには弾かず、ドレミファ…というように鍵盤を1音ずつ順番に押して吹くことしかできなかった。それに対して教師は、音を出したり鍵盤に触れる楽しさを知ってほしいという思いから、違う音を出しても叱らず、それを評価していた。ある時、教師がどれみシールを使ってA専用の楽譜を作ると、Aはそれに興味を示した。そこで教師が鍵盤にもどれみシールを貼ると、Aは曲通りに弾くことができた。その後はどれみシールの楽譜を使用せずに、教科書の楽譜のみでも弾けるようになった。

○活動の全体の流れ：鍵盤ハーモニカの練習方法や合格かどうかを判断する評価の仕方は毎回異なる。よってそれぞれの場合の教師の指導法・支援方法とAの様子を記載する。

3-1. 個別練習の場合

個別練習の時間をとると、教師はほとんどの場合Aの練習を見る。

教師：練習方法を全体に指示した後、Aの隣に座り、Aの練習をみる。

Aへの指導法：曲名を言って楽譜を用意させたり、楽譜を指差して指示する。始めの音を鍵盤で指して教えたり、階名で歌いながら楽譜をなぞったり、弾いてみせたりしながら練習させる。

Aの反応：呼びかけに応じて練習する。

他の子ども達：質問がある子どもや教師に見てほしい子どもは教師の所に来る。

教師：時々他の子どもの様子も見に行く。

3-2. 教師が子ども達を1人ずつ評価する場合

これは教師が子ども達を並ばせ、1人ずつ演奏させて合格かどうかの判断をする場合のことである。

教師：教壇の前に教壇と平行に座り、自分の正面に子ども達を並ばせる。

子ども達：教師の前に一列に座って並び、順番に教師に曲を見てもらう。

教師：子ども達の演奏の合間にAに自分の横に来るように声をかける。

A：なかなか来ない。

教師：Aの隣の子どもの、自分の所に来るようにAに伝えて、と言う。

A：隣の友達に促され教師の横に来る。

教師：他の子どもの演奏を聴きながら、Aの鍵盤を押したり楽譜を指したりして練習させる。Aが演奏できそうな曲（特に「きらきら星」）を見せに来た子どもがいると、教

師は「Aも一緒に弾こう」と言って2人で演奏させる。

この時教師は、他の子どもの演奏を聴きながらAにも演奏指導するという、2つの作業を同時に行っていた。

3-3. Aが活動に参加しない場合

これはAが、教師の「弾こう」という呼びかけに応じず、弾かずにシールだけを貰おうとしたことに対し、教師は決まりを教え、弾かせようとした時のことである。

教師：鍵盤ハーモニカを開いて用意し、吹き口をAの口へ持っていき「ふー」と言ってみせるがAは反応しない。合格シールを提示し「A、(鍵盤ハーモニカを)弾きます、(そうしたら先生がシールを)貼ります」とAに分かりやすい言い方で決まりを説明する。

A：「シールください」とせがむ。

教師：隣の子どもの「チューリップ弾いてみて」と言って弾かせ、Aに「A、B(隣の子ども)弾きました、シール貼ります」と言ってBの楽譜に合格のシールを貼る。

A：「シール貼って」と言い続ける。

教師：「じゃあA、シール貼ったら弾きますね」と言ってAの楽譜にシールを貼るがAは弾こうとしないので教師はシールをはがす。

A：「シール、シール」と言い続ける。

教師：教師は「駄目です」と言ってAから離れエレクトーンの所に行き、全体に声をかけてから「きらきら星」を弾き始めた。いつもとは違う、優しい音色番号を選んで演奏した。

A：前奏が聴こえた途端に鍵盤ハーモニカを準備し、伴奏に合わせて弾き始めた。

どうしても言うことを聞かず機嫌の悪いAであったが、優しい音色の「きらきら星」の前奏が聴こえた途端、今までの態度が嘘のように、鍵盤ハーモニカを弾き始めた。教師はAのその時の精神状態を考慮し、いつもの元気の良い音色よりも、柔らかく優しい音色の方が適切であると判断し、それを選んで演奏したのである。

3-4. 全員合奏で、Aが呼びかけに応じず、一人でずっと自分の好きな曲を弾いている場合

教師：Aの所に何度か来て、みんなと同じ曲を演奏するよう促す。

A：最後まで好きなように曲を弾き続ける。

教師：他の子ども達が鍵盤ハーモニカを片付けている間に教師はまだ弾き続けているAの所に来てしばらく様子を観察する。そして「今日は楽譜の順番通りに弾きたかったのね」とAの行動の理由を理解していた。

A：楽譜を順番通り最後まで弾き終わると友達に手伝ってもらいながら、片付けた。

Aは、日によって行いたいことや行いたい順番が違い、こだわりもある。教師はAをよく観察し、Aに対して言葉や音楽で働きかけ、Aの考えていることや行動の意味を理解しようとしている。

IV. 考 察

授業実践の中から主な活動を3つ取り上げ、教師のAに対する支援を中心に述べてきた。活動自体は一般的なものであるが、活動におけるこれらの教師の支援が教科交流を行う上でどのように意義があるのか、考察する。

1. 活動①『リズムによって名前呼び』

この活動は、リズム感覚を身につけさせるだけでなく、音楽の授業の導入として大切な役割を担っている。それは、子ども達が音楽の授業で自分を「表現する」為に必要な活動だからである。それはこの活動に以下のような特徴があ

り、教師・子どもにとっても以下の意味があるからである。

① 活動の特徴

- ・名前を使ったふし遊びなので、子どもの生活に身近で、楽しんで取り組める。
- ・決まりが少ない。
- ・基本の形で行っても良いし、工夫して行うこともできる。

② 教師にとって

- ・一人一人の子どもと直接関わることができる。
- ・一人一人を観察でき、表現を見てすぐに評価できる。
- ・子どもの今の様子を知ることができる。
- ・前回と比較することができる。
- ・一人一人の存在と表現を認め、それをクラス全員で共有することができる。

③ 子ども達にとって

- ・自分の名前を必ず呼んでもらえる（自分の存在を認めてもらえている場であるという認識を持つことができる）。
- ・自分の表現ができ、それを教師に認めてもらえる。
- ・毎回違う表現に挑戦することができる。
- ・友達表現を見て、参考にしたり評価したり、認めることができる。

④ 特殊学級の子どもにとって

- ・自分の名前を友達や教師に必ず呼んでもらえる（自分の存在を認めてもらえている場であるという認識を持つ）。
- ・自分の表現方法で参加でき、それを評価してもらえる。
- ・友達表現を見ることができる。

この活動は決まりが少なく簡単である反面、子どもによっては工夫することもできる。このことから子ども達は「間違えたらどうしよう」といった技術面での心配をせずに、自分の行いたい表現を自由に行うことができる。これに対

し教師も、子ども達一人一人の表現を認め、評価することができる。これによって子ども達は「自分を認めてもらえる」という安心感を持つことができ、授業に心を開いて参加し、表現することができるようになる。またこれをクラス全員で行うことで、子ども達は教師に対してだけでなく、他の子ども達の前でも自分を表現できるようになり、クラスの一体感も生まれる。このような活動は音楽療法のセッションの導入においてもよく行われている。

特殊学級の子どもは、音楽や体育のような実技系の授業のみに教科交流で参加する機会が多い。その子ども達にとって、時々しか行かない通常学級は自分の本来所属する場所ではない。このことから、特殊学級では活発だったり、教師の指示に従ってきちんと座っていることができる子どもでも、通常学級の授業に来ると大人しくなってしまうたり、教師の言うことを聞けず、教室内を歩き回ったり、外に飛び出していつてしまったりすることがある。これはいつもと違う教室や教師、周りの子ども、授業に対して、不安だからという場合が多い。このような特殊学級の子どもに対して、その子どもの存在を認め、その子どもも自分達のクラスの一員であり、仲間であるという思いを全員が持つことが、まずは大切である。そして音楽の授業の構造化を行い、見通しを持って授業を受けられるようにしたり、様々な刺激を整理したりして、子どもが安心してその場にいられるような環境を作ることが必要である。このような環境を作ることができれば、特殊学級の子どもでも、授業に参加し、表現し、楽しい時間を過ごせるようになる可能性が高いと考える。音楽で表現活動ができるようにする為には、まずはこのような「安心して表現できる環境作り」が必要になってくる。

この「自分を認めてもらえる」という安心感は、特殊学級の子どもに限らず、どの子どもにとっても必要なものである。このような意識を持つことができなければ自分を表現するという

行為は行えない。高学年になると表現すること自体が恥ずかしいと思う傾向があることから、低学年のうちにこのような経験を積ませることが大切である。

ここから、音楽の授業において大切なのは、まずは子ども達が自分を表現できるような環境を作ることと言える。その為には子ども達が、教師や他の子ども達に、自分の存在と自分の表現を認めてもらえるという安心感が必要である。そして他の不安要素がある場合はそれらを1つずつ解決し、安心してその場にいることができるようにすべきである。よってこの活動は、教科交流の場合に限らず、子ども達が授業に参加し自分を表現する為にも非常に大切な活動であると言える。

2. 活動② 『歌唱活動』

歌唱活動は一斉に行う活動なので、特殊学級の子どもに対して個別指導する機会が少なくなりがちである。しかし本実践においてはこのような歌唱活動においても個別指導が行われていた。

まずこの教師は授業中、特殊学級の子どもに対して頻繁に注意を向け、声をかけている。特殊学級の子どもは、全体への声かけが自分に対してでもある、ということを理解できない場合や、教師の言っている意味が理解できない場合がある。そのような子どもに対して直接、その子どもにとって分かりやすい言い方で声かけをすることが大切である。

次に指導の工夫として、声かけだけでなく、楽譜を開いて実際に見せたり、目を合わせて表情や動作で指示を伝えたりしている。特殊学級の子どもは、声かけだけでは理解できない場合が多い。よって視覚的な情報を用いて支援するこのような方法は、障害児教育の中でも頻繁に行われておりとても有効である。

このような接し方を教師が他の子どもの前で行うことによって、他の子どもも特殊学級の子どもとどのように関われば良いのかを学ぶ機会

となっている。そしてこのことが、教師が直接指導できない場合にも、周りの子ども達が教師の代わりに特殊学級の子どもと関わる場面に生かされている。このような周りの子ども達の協力が、教科交流を行う際には必要である。

また教師はAの性格や音楽に対する好み、特徴をよく理解している。Aがどのような音や音楽が好きか、またその理由を、特殊学級の担任や家庭などを通して理解している。このような特徴を教師が理解していることは、子どもにどのような音楽でどのように関わらせるかという個別目標を設定する為の材料となり、また子どもの行動理解にも役立つ。こだわりの強い子どもにとって、自分の気持ちを理解してもらえないことや、嫌なことを無理強いさせられることはとても辛いことであり、それが授業に参加できなくなる理由でもある。教師はAが好きな歌は歌うが、あまり好きではない歌は歌わないということを知っているので、嫌な歌を無理に歌わせようとはしない。そのような時には、時間をかけて慣れさせ、Aが自分からできると思うまで待つ、という姿勢を大切にしている。また子どもの特徴を理解していることで、その子どもの一見意味のないように見える行動も、意味のあるものとして見えてくる。Aが元からあまり好きではない歌の時に楽譜を開かない場合と、好きな歌なのに楽譜を開かない場合では、同じ「楽譜を開かない」という行為でも、全く意味が違うことが分かる。普段は歌う曲なのに開かない場合は、いつもと違う思いがAの中にはあるということである。また、今までは歌っていなかった曲を歌った場合には、教師はAをきちんと評価できる。それはAの中で何かの変化、成長があり、今までできなかったこと、しよとしたことができたようになったからである。

このように、子どもを理解し、周りの子ども達の協力を得ながら指導上の様々な配慮をし、子どもにとって分かりやすい活動を行うことで、特殊学級の子どもも目標を持って、歌唱活動に

参加できることが分かる。

3. 活動③ 『鍵盤ハーモニカ』

この記録から、同じ鍵盤ハーモニカの活動の中でも、毎回Aの様子が違うことが分かる。教師は、子どもが今日はどのような気持ちなのか、どのようなことを考えているのかを予測し、対応の仕方を考えながら、授業を進めていかなければならない。

教師は授業中Aを理解する方法として、音楽を使ってAと対話している。障害のある子どもの音や音楽に対する感覚や感受性は、敏感で豊かである場合が多い。それは、ある音や曲を聞いたら泣き出してしまうことや、流れてきた音楽に反応することから分かる。よって教師は、曲を変えたり、リズムやテンポ、音色など音楽の諸要素を変えたりしながらAの様子を探り、変化を見ながら、Aが少しでも活動に参加できるようにしていく。この方法はとても有効であり、これが音楽の教師だからこそできる、音楽を通しての子どもとの関わり方だと考える。

また鍵盤ハーモニカのような演奏技術が必要な活動においては、それが「できる」ことが参加する為の必要条件となってくる。よってできるようにする為に、授業中の個別指導が不可欠である。しかし40人近い子どもの中で他の子どもを置いてその子どもだけにつきっきりになることはできない。ではどのようにすれば個人指導が可能になるであろうか。

まず教師は、自分の指示をAに出しやすいように、教室環境を変えている。自分の指示が直接出せる場所にAを座らせたり、教師が移動してそこから全体を見るようにしたりしている。このように教師は必ず黒板の前にいる必要はないので、教室の中を自由に動いて回り、子ども達を自分のいる方向に向かせ、そこから指示を出せば良い。場所に縛られず、個人を見ながら全体を見る、という技術が必要である。

また、授業中に個別指導をする為には他の子ども達の協力が不可欠である。Aに対してはも

ろろん、子ども達同士での鍵盤ハーモニカの教え合いなど、教師一人だけで子ども達全員に個別指導をしなくても良いような工夫が必要である。全員が協力して、みんなで一緒に学んでいくという姿勢が大切である。

ここで注意しなければならないのはあまりにも特殊学級の子ども1人だけに目をかけすぎて、他の子ども達への指導が疎かになってはいけない、という点である。特殊学級の子ども以外にも個別指導の必要な子どもはおり、子ども達はみな、教師に自分と関わってほしいと思っている。このことから教師は、子ども達一人一人をきちんと見ることができるようにならなければならない。教師はどのような子どもに対しても必要な時に指導ができるよう、個人と全体の兼ね合いを考えながらクラス全員で協力し、授業を行っていくことが必要である。

授業の前後の休み時間にも、この教師は個別指導する時間をとっている。子ども達は休み時間になるとほとんどすぐ音楽室に来るので、教師は休み時間から教室で待っており、子ども達と関わるようにしている。これは技術指導の上でも大切だが、子ども達との信頼関係を作る上でも大切である。

Aの場合は、特殊学級の教師、保護者や兄弟にも練習を見てもらっている。演奏技術を習得する為には、音楽の授業以外での練習が必要になってくる。よって音楽の教師と特殊学級の教師、家庭との連携が必要である。

このように音楽の教師だけでなく、家庭、特殊学級の担任、そしてクラスの子も達が連携して、みんなで特殊学級の子どもをはじめ、一人一人の子どもを育てていくという姿勢が重要である。この連携は子どもへの共通理解と、関わり方を知る上でも大切である。

V. おわりに

IVの考察をふまえ、教科交流の際、音楽の教師がどのように特殊学級の子どもを支援すべきか、以下にまとめる。^(註1)

1. 特殊学級の子どもが音楽の授業で、安心して「表現できる環境」を整える

①教師との信頼関係を作る。

- ・観察や特殊学級・家庭との連携を通して、子どもの障害や性格についてよく理解し、接する。
- ・音や音楽を使って子どもを理解し、更にそれを使ってコミュニケーションをとる。
- ・子どもの存在と、様々な表現を認める。

②子ども達同士の信頼関係を作る。

- ・特殊学級の子どものことを、様々な音楽活動を通して見せ、分かるようにする。
- ・特殊学級の子どもへの接し方を、教師の態度を見せることで知ってもらう。
- ・共に学び合う、という態度を育てる。
- ・友達の成長を共有し、認められるような場面を設定する。

③活動や環境の構造化を行う。

- ・刺激を整理し、見通しを持って授業を受けられるようにする。

2. 子どもが自分の思いを「表現できる」ようにする

①個別指導を行い、できる・わかるようにする。

- ・個別目標の設定
- ・声かけや指導の工夫
- ・教材の工夫
- ・個別評価の設定

②活動を工夫する。

- ・楽しい活動
- ・個々の能力に合わせられ、その場でいろいろと対応できるような柔軟な活動
- ・教室空間を自由に使った活動
- ・成果を全員で共有できるような活動

3. 共に育てる体制を作る

①特殊学級や家庭と連携する。

②子ども同士の学び合い、育て合いの姿勢を育てる。

③教師が特殊学級の子どもと通常学級の子ども達とをつなげる役割を担う。

音楽の授業で子ども達が安心して自分を「表現できる」ようになる為には、まずは教師が子どものことを、音楽などを用いながら理解し、関わり、子どもに信頼されることが必要である。そして子ども達が表現したい気持ちをそのまま出せるように、技術指導を行い、その成果を全体で共有し、認め合えるような子ども達同士の関係を作っていくことも重要である。音楽の教師は、たとえ言葉による会話ができない子どもに対しても、音楽を通して信頼関係を結んだり、コミュニケーションをとったり、活動を共にでき、その子どもの能力を引き出して伸ばすことができる。斉藤(1997)は「知的障害を持つ子ども達にとって、音楽は、豊かな感受性を養い、歌や動作、楽器などによって表現の幅を広げるとともに、言葉によらないコミュニケーションや周知の世界への同調や同化、感覚-運動や認知-パフォーマンスの豊かな結びつきを高める機能を持っている」とし、「音楽は生活を豊かにし、より豊かな人間形成をはかり、楽しさ、明るさをもたらす」と述べている。このような音楽と子どもを出会わせ、音楽を使って生きる力を育み、子どもの音楽的能力を伸ばすことは、音楽の教師が子ども達全員に対して負っている責任である。

この授業観察の結果、音楽の教科交流において、教師が行わなければならない支援について少し明らかにすることができた。今回は広汎性発達障害の子どもに対しての教師の支援を上げしたが、今後は、他の障害のある子ども達に対しての教師の支援方法を見ていく必要がある。そして海外での実践等も参考にしながら、子ども達が楽しく音楽を学び、表現できるようにする為の活動や方法、教師の支援について、更に研究を深めていきたい。

注1) 日本学校音楽教育実践学会のプロジェクト「通常学級における障害児教育のあり方」(平成16~18年)の、平成18年度全国大会で加藤がまとめた「音楽教育における特別な教育的ニーズとは」という課題への提案を参考にまとめた。

文部省(1999)「盲学校、聾学校及び養護学校
小学部・中学部学習指導要領」

引用文献

斉藤一雄・斉藤加代子(1997)「障害児のための音楽・リズム」 明治図書 p.5~8

参考文献

- 丸山忠璋(2002)「療法的音楽活動のすすめ—明日の教育と福祉のために—」 春秋社
- 土野研治(2006)「声・身体・コミュニケーション—障害児の音楽療法—」 春秋社
- 大南英明 緒方明子(2002)「障害児教育論」 放送大学
- 緒方茂樹(2000)『障害児教育における音楽を活用した取り組み(Ⅰ)—データベースからみた特殊教育諸学校の現状—』 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 No.2, 61-75
- 細谷一博、大庭重治(2001)『小学校特殊学級に在籍する児童を対象とした教科交流(体育)の実施形態に関する試論』 特殊教育学研究, 38(4), 21-28
- 巖隆志、緒方茂樹(2003)『小学校特殊学級における交流教育の取り組み』 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 No.5, 99-109
- 岡野厚子(2005)『中学校特殊学級における音楽指導—広汎性発達障害がある生徒への支援に視点を当てて—』 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 第1集 pp.223-231
- 日本学校音楽教育実践学会編(2002)「障害児の音楽表現を育てる」 音楽之友社
- 日本学校音楽教育実践学会(2006)「学校音楽教育研究2006 Vol.10」 pp.21-26
- 文部省(1998)「小学校学習指導要領」